同じ敷地内にある特別支援学校高等部分教室と高等学校が連携した事例

特別支援学校（知的障害）高等部分教室の生徒が同じ敷地内にある高等学校と職業科や生徒会活動などにおいて行った交流及び共同学習

〇概要

Ａ生徒は、Ｂ特別支援学校（知的障害）高等部３年に在籍する、知的障害と自閉症がある生徒で、特別支援学級から進学してきた。Ａ生徒は日常生活では自立しており、学級内の他の生徒に比べると認知面に関する能力の高さが見られた。しかし、適切な対人関係を形成することに困難さがあり、自分の興味があることを一方的に話してしまったり、早口で話してしまったりする等の様子が見られた。

本事例は、Ａ生徒の卒業後の就労に向けて、コミュニケーション能力を育むための、同じ敷地内にあるＢ特別支援学校高等部分教室とＣ高等学校との交流及び共同学習における、Ａ生徒への合理的配慮を検討した事例である。分教室における職業科、Ｃ高等学校生徒会による「スマートフォンやインターネットのトラブル防止啓発活動」、体育科における交流及び共同学習で合理的配慮を行い、対人関係の学習につなげた。また、交流及び共同学習で学んだことが活用される機会の設定や、通信を介した保護者に対する、交流及び共同学習の意義についての理解推進を図った。

１．対象生徒について

Ａ生徒　：Ｂ特別支援学校（知的障害）の高等部３年生。知的障害を併せ有する自閉症と診断されている。日常生活は自立しており、学級内の他の生徒と比較して認知能力の高さが見られる。一方、物事や人に対して嫌だと思い込むと、気持ちが後ろ向きになることもある。他の生徒とのコミュニケーションにおいて、自分が興味を持つことを何度も一方的に話してしまったり、早口で話してしまったりするなどの様子が見られ、人の気持ちを読み取ることや、人の話を聞くことが苦手である。

２．活動のねらい

Ａ生徒は学校卒業後、企業就労して自立した生活を送りたいという希望をもっている。Ａ生徒の希望を踏まえて、Ｃ高等学校との交流及び共同学習においては、学習内容を理解し、Ｃ高等学校の生徒と協力して活動することと、場に応じた適切なコミュニケーションをとることを課題として設定した。

３．事前の取組と配慮

Ｂ特別支援学校分教室はＣ高等学校と同じ敷地内に設置されており、分教室の生徒

がＣ高等学校の美術部や茶道部の活動に参加するなど、両学校の生徒間での自然な関わりが見られている。なお、生徒によっては、小・中学校の同級生との交流及び共同学習に不安や抵抗を示すことがある。そのため、入学当初は、障害のある生徒と日常的に接してきた経験のあるＣ高等学校３年生との交流及び共同学習から始めた。

事前の取組については、Ｂ特別支援学校教員がＣ高等学校の教員に、Ａ生徒の障害特性を伝え、合理的配慮に関する共通理解を図った。また、交流及び共同学習でＡ生徒とペアになるＣ高等学校の生徒は、Ａ生徒にうまく対応できる生徒とした。

４．活動の様子と成果

交流及び共同学習を始めるに当たり、まず、分教室主体で職業科において交流及び共同学習を行い、次のように配慮した。

（１）Ａ生徒がインターンシップにおいて製作している部品等の組立作業を取り入れて、スモールステップで製品が完成されるようにした。

（２）作業方法や作業内容について、視覚的支援を用いて伝えるようにした。

（３）挨拶、返事、報告、質問などに関するソーシャルスキル指導を行った。

また、Ｃ高等学校生徒会が主体となり「スマートフォンやインターネットのトラブル防止啓発活動」を行い、次のような配慮を行った。

（１）内容を視覚的に理解するためのスライドや動画を活用した。

（２）授業後のアンケートには振り仮名を付け、Ｃ高等学校の生徒が１問ずつ質問を読み上げて、その質問に回答するようにした。分教室の生徒の進度を確認しながら、困っている生徒にはＣ高等学校の生徒が支援するようにした。

このほかに体育科の授業では、他の生徒とのコミュニケーションを必要とするターゲットバードゴルフを行った。このゲームの中では、両校の生徒が互いにコミュニケーションを取る場面を意図的に設定し、お互いに会話すると次のコースに進めるルールとした。会話を文字に起こしたメモを活用することで、Ａ生徒は、相手校の生徒とのコミュニケーションが図れるように配慮した。

写真１　防止啓発活動時の様子

写真２　メモを活用したコミュニケーションの様子

Ａ生徒はＣ高等学校の生徒との交流及び共同学習を通して、コミュニケーションの大切さに気付き、学習成果を認めてもらえる喜びを知ることができ、その後の授業にも意欲的に取り組めるようになった。また、他の生徒とのコミュニケーションの方法や他者理解、上級生に対しての姿勢などのスキルを身につけることにつながっていった。さらに、他の生徒との会話の場面では、他者の思いを聞き取ることや、他者に対して分かりやすく、ゆっくり話すことを意識するようになってきた。作業においては、自分のペースで作業を進めるのではなく、作業マニュアルを意識するようになった。

５．事後の取組、今後の課題

交流及び共同学習で学んだことが今後も活用されるように、Ｃ高等学校の生徒と共に地域のイベントに参加して、模擬店での販売活動や、Ｃ高等学校美術部と共同制作したジオラマの交流文化祭における展示などを行った。交流文化祭終了後にはジオラマを、Ｃ高等学校とＢ特別支援学校分教室をつなぐ渡り廊下付近に設置した交流スペースに展示し、両校生徒同士の自然なやり取りを促した。さらに、分教室通信を発行して、分教室に通う生徒の保護者等に対して、分教室での取組や交流及び共同学習の様子などを知らせて、交流及び共同学習の意義についての理解推進を図った。

今後、Ａ生徒の社会自立の実現に向けて、学校と就労先との間で、事前の調整や連携を十分に図っていきたい。